

文化の発信と販路開拓に挑戦する伝統技能職人集団

～文化への出会いと感動を演出する周到な準備～

事業者名：蒼築舎

1 ミラノ万博への出展までの道のり

(1) 取り組みの背景

蒼築舎株式会社は、日本古来より伝わる土壁の家の左官仕上げ（塗り壁・漆喰・竈（かまど））の伝統技術を守り伝える松木憲司が率いる左官職人集団である。松木は15歳で左官職人に弟子入りし、以来、長年にわたって左官技能にこだわり、その技術は、全国左官技能競技大会優勝・建設労働大臣賞受賞、国土交通大臣顕彰建設マスター、現代の名工など、数々の受賞歴で裏付けられている。

左官とは、建物の壁や床、塀などを、こてを使って塗り上げる職種であり、日本の風土にあった日本で取れる天然素材を使用した寺社建築や住宅の建築には欠かせないものである。コンクリートなど近代的な建築材料が多く使われるようになった近代においても、基礎工事や床の施行に使われるコンクリートのならしなどにも左官の技術が生かされてきた。高度経済成長の時代に入るとコンクリートやモルタルなどをあらかじめ工場で製作することが多くなるなど、左官工事が減少し、左官職人の数も減っていったが、最近では漆喰、珪藻土や土などの天然素材が見直され、和モダンスタイルの建築物などで左官技術が使われている。

(2) ミラノ万博への参加

松木は、持続可能性のある社会の実現に向けて、日本の優れた「土の文化」を後世に残して行きたいと、様々な取り組みを行ってきた。日本全国はもとより世界の土やその他の素材を集めながらオリジナルの調合を重ね、品質向上に余念がない他、こどもの泥団子作りイベントに積極的に参加したり、「もっと土に親しんで欲しい！」とこどもたちとのワークショップを開催して実物大のゾウをこどもたちとともに制作したりして、天然素材である土と触れる楽しさ、モノをつくりだす楽しさをこどもたちと分かち合う「土育（つちいく）」を行ってきた。

左官が土を扱う技術には塗りのみならず、磨きや鏡面仕上げ、彫刻など様々なものがある。松木は住宅や建築物の左官工事を請け負ってきた他、こうした伝統の左官技術を活かし、芸術品と工業製品の間にある、日常空間にありながらすごいものを生み出したいと考えるようになった。

こうして生まれたのが、左官が土で作ったかまど、「コハッツイシリーズ」である。それまでの土の文化に加え、新たに火の文化を見直し、失われつつあるかまどや伝統左官技能を伝えるという使命を託したこの商品群は、大手百貨店で販売したところ、大きな評判をよび、松木がイタリアやフランスとつながっていくきっかけとなった。



ミラノ万博に出品した、左官が土で作ったかまど、cohattui

2 ミラノ万博への出展を活かす

東京で注目をあつめる

実は、松木はすでに15年以上前に、かまどを手に出展会に参加している。名古屋で開かれたゼロ・エミッション関係の展示会に出展したのだが、当時は何の反応もなかった。日本の伝統文化の見直しという提案は、当時はまだ早すぎたのかもしれない。

しかし、土の文化、火の文化を広めたいという思いは止まず、その後も松木は、かまどの取り組みをあきらめなかった。地道な商品改良などの活動が実を結び、前述のように東京の百貨店から声がかかり、ガラスや金属など、他の素材の商品と組み合わせたイベントが評判を呼んだ。東京の百貨店での活動は、流行に敏感な層や、本物を求める人達の注目をひきやすい。松木は、海外の大学から、隔年で「土」に関わるイベントの講師として招聘されるようになったのである。

3 イタリアでの新たな出会い

万博出展をどう活かすか

こうして徐々に海外とのつながりができてゆき、蒼築舎が海外と関わる活動をしていることが、関係者に知ら

れていったことから、ミラノ万博出展の誘いが舞い込んだ。松木は、ミラノ万博出展を決めるよりずっと以前から、日本の左官文化の海外展開を考えており、イタリアでの活動の機会は、まさにその狙いに沿うものであった。万博は大きな展示会ではあるが、もちろん、かまどの販売や左官の事業展開が、一回の現地訪問や有力展示会出展でいきなり可能となるわけではない。ヨーロッパの土の文化との出会い、海外の優秀な人材との出会いを広げ、新しい刺激を左官の世界にもたらす機会とするために、欧州訪問をどう活かすか、これが課題であった。

ミラノ出展に合わせ、前後に現地での活動を幅広く行なうことを松木は計画した。幸い、これまで何度も現地に赴いたことがあり、人脈もある。そのつてをたどり、現地側に渡伊の話をする、ヨーロッパにはない左官の技術を紹介するセミナーを各地で開いて欲しいとか、建築系の大学が開催するワークショップに講師として参加して欲しい、といった要請が間髪をいれず舞い込み、現地での滞在は90日をこえるような計画となり、農林水産省が主催したUNESCO レセプションをはじめとして、イタリア生態建築協会のセミナー、現地の一般小売店での実演デモなどを、イタリア各地で行い、土の魅力、火の文化を伝える活動を、各地で行っていったのである。



ミラノ万博・日本館イベント広場でのコヘツツイの展示風景



FINITURE GIAPPONESI IN TERRA CRUDA - Iscrizione

7 e 8 ottobre 2015 - Seminario FINITURE GIAPPONESI IN TERRA CRUDA Per ragioni organizzative, si prega di compilare il Form in ogni sua parte,...

イタリア国生態建築協会セミナーの告知に掲載された塗りの現場

3 課題と今後の取組

今回の万博出展を機に、蒼築舎では様々なプロジェクトが進み始めた。まず、日本で練りに練った商品である cohettsui そのものは、イタリアで高い評価を得たが、一方で、cohettsui の世界観を広げるためのしかけとして火や土が使われる空間そのものの提案があると、更に思いが伝わりとの着想を得、現在、現地イタリアのデザイナーとの協業プロジェクトが進んでいる。

また、ミラノ万博の出展で知己を得た三重県内の事業者と、連携協力の話が持ち上がり、こちらのほうも、実際に動き始めた。さらに昨今のインバウンドの盛り上がりに対応するため、cohettsui のみならず、三重県の産物を活かしたいいくつかのプロジェクトも進行中である。

こうしたプロジェクトは、蒼築舎の商品の優れたプロダクト・デザインのみならず、積極的な情報発信、長年に渡る探究心がもたらしたものであることはいまでもないが、何より重要なのは、こうした準備をしてきたからこそ、万博という舞台での人との出会い、機会をつかみとることが出来たということである。それがさらに、左官という技術・職に興味を持つ人を集め、互いに高め合って優れた商品・サービスを生み出すという好循環に繋がっている。

蒼築舎は、今後も、国内外に。土の文化、火の文化を広め、大地から得られる恵みを活かし、情熱の炎を燃やし続けていくことであろう。



(作成者)

一般社団法人食品需給研究センター
三重県 食の産業情報発信支援業務委託事業
三重県事務局：魚野 剣太郎